

## あとがき

本書の執筆を思い立ったのは、2012年の暮れのことであった。ただし、当初の計画は、ごくささやかなものであった。翌2013年が日本・ベトナム外交関係40周年を迎えるに当たって、近年両国間で展開されている「戦略的パートナーシップ」外交について整理しようと思い立ったのである。

しかし、その作業に着手してみると、日本がベトナム以外の国々とも（戦略的）「パートナーシップ」の関係性を有していることが気になり始めた。かくして、あれこれの情報を検索しているうちに、2国間のみならず多国間の関係性をも包含し、さらに地理的な対象範囲も芽づる式に拡大して、最終的には世界の5大陸を網羅するに至ってしまった。

対象が膨大であるがゆえに、細かな点にまで目が行き届ききれていないし、また、筆者が見落とした重要な共同文書類が、（とりわけ1990年代及びそれ以前の時期について）存在すると思われる。

序章でも述べた通り、本書のもともとの狙いは、日本の（戦略的）「パートナーシップ」外交について、おおよその全体像をデッサンすることにあった。書き漏らした事象が少なからずあろうが、当初の目的はほぼ達成できたのではないかと思う。

ただし、本書の射程範囲は、もともと限定されたものであった。例えば、（戦略的）「パートナーシップ」の合意が成立した背景、それに至る日本側の政策決定のプロセス、及びカウンターパートとの折衝経緯などについて、個々の事例に沿って掘り下げた分析をしていない。あるいは、（戦略的）「パートナーシップ」文書の発出以前と以後で、日本とカウンターパートの関係が、いかに変化したのか（あるいは変化していないのか）、（戦略的）「パートナーシップ」文書に盛られた（もしくは付随する）行動計画の具体的内容は、どのようなものであり、それらは実行に移されたのか否か、等々の疑問にも十分答えていない。

もとより、独りの研究者が、以上のような諸問題について、世界の各地域や各国を万遍なく調べ分析することは、能力的にも物理的にも不可能である。ただし、筆者としては、自らの専門であるベトナムやその周辺に位置する諸国の事例に関して、今少し具体的で掘り下げた調査を試みたいと考えている。これは、今後の課題である<sup>40</sup>。

さらに、「戦略的パートナーシップ」外交を日本の外交政策全体の中に位置づける作業、あるいは日本の「戦略的パートナーシップ」外交を他国（例えばベトナム）のそれと比較する作業なども、将来的なテーマとして有望であろう。さらには、例えば日本と中国の間で近年顕著となっている外交上の競合関係を、（戦略的）「パートナーシップ」外交という切り口で整理することも可能であろう。

---

<sup>40</sup> 日越関係については、白石昌也「日本・ベトナム間の『戦略的パートナーシップ』：その経緯と展望」『アジア太平洋討究』22号（近刊）を執筆した。

より一般的に、国際関係論もしくは国際政治学における3つの潮流のうち、リアリスト的な解釈に基づけば、同盟関係ほどハードではないが、通常の状態間関係よりはるかに重い意味を持つ「戦略的パートナーシップ」外交を、パワー・ポリティックスの展開や自国の安全保障環境の改善にとっての貴重なツールと捉えることができる。リベラル的解釈に基づけば、経済的相互依存関係の増大、さらにODAや貿易といった技術的、経済的な分野から、より広範で高次の関係へのスピルオーバー、あるいは地域協力の展開する中での2国間関係強化などなどのプロセスに、(戦略的)「パートナーシップ」外交を位置づけることができよう。そして、コンストラクティビスト的な解釈に基づけば、対話や協力を積み重ねるプロセス、そしてより強固な仲間意識や地域的アイデンティティー形成のプロセスにおいて、(戦略的)「パートナーシップ」外交が果たす役割に着目することができよう。

本書は、以上のような様々な課題にとって有益な基礎的情報、知識を提供することには、ある程度成功したと考えるが、研究を一つの山に譬えれば、まだその入口から少し登ったあたりにいるにすぎない。

最後に、かなり分厚い本書をリサーチ・シリーズのモノグラフとして刊行することに同意して下さった早稲田大学大学院アジア太平洋研究科（ならびにアジア太平洋研究センター）の同僚の先生方、種々便宜を図って下さった事務室の皆さん、そして参考文献の検索や校正作業、巻末索引の作成で協力してくれた早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士課程の島林孝樹君と修士課程の富塚あや子君、ならびに印刷に際して細かい配慮をして下さった国際文献社に、深甚の謝意を表したい。また、本書を執筆する過程で、特に名前を記さないが、実に多くの方々から貴重なアドバイスや示唆を頂いた。ただし、本書の欠陥や誤謬は、ひとえに著者ひとりの責任である。

2014年1月

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 教授 白石昌也